

# TOKYO PAPER

ト キ ョ ー ペ ー パ ー  
for Culture

フォー カルチャー

見慣れたコピー、記号化された情報に、思考は停止するばかり。新陳代謝の激しいこの街は、今日はあるけど、明日はないかもしれないものに溢れている。「なんでもあるようで、なんにもない」。そんな想いに時折駆られても、突き詰めてみれば人も街も等しく生もので、変化のなかを生きていた。だからこそ毎日愛おしい。例えば隣人と挨拶を交わす。ささやかな習慣、日々の積み重ねが街の風景を変えていく。「首都・東京」から、「私の住む街東京」へ。小さな単位で誇らしく、この街と生きていこう。

Encoded information and banal advertisements surround us, paralyzing thought. In this city where the new constantly replaces the old, what exists today may well be gone tomorrow. The city offers everything and nothing at all. Who has not been seized by that feeling from time to time? Yet in truth the city, like the humans who inhabit it, is a living being that exists in a state of flux—and this is what makes each day here a gift. Think of the greeting exchanged with a neighbor. Day by day this tiny action accumulates, transforming the urban landscape. “Tokyo, the capital of Japan,” becomes “Tokyo, my hometown.” Proud of its smallest facets, we share our lives with this city.

第七号 / 007



こんにちは、東京ローカル

蜃気楼の街が照らす光

水道橋博士(芸人) × 安藤桃子(映画監督) × 曾我部恵一(ミュージシャン)

研究テーマ⑦: TOKYO FABBERS

誰もが作り手になれる、デジタルものづくり革命

TOKYO LOCAL PRESENTATION / 私にとって東京文化とは、



## 蜃気楼の街が 照らす光

大都市、東京……ではなく、自分が暮らし、自分を営む街として、できるだけ小さな単位、ローカルな眼差しで東京を見つめたい。そんな想いに駆られた第七号。とするなら客員研究員は、この3人！水道橋博士さん（芸人）、安藤桃子さん（映画監督）、曾我部恵一さん（ミュージシャン）。直感に導かれ、お招きしました。

The sprawling city, Tokyo...Instead of that, our 7th edition is built on looking at Tokyo through as narrow a lens as possible. We want to see the local Tokyo, the Tokyo where we live and pursue our own activities. We invited three guest researchers we believe to be best suited for the topic: Hakase Suidobashi (comedian), Momoko Ando (film director), and Keiichi Sokabe (musician).



待ち合わせは、門前仲町。江戸の情緒を色濃く残す街並みと商店街のにぎわいが印象的なこの街で、初対面を果たしたお三方は、そのまま富岡八幡宮から辰巳新道までをぶらり散策。表現者としてメジャーなフィールドで活躍されるお三方ですが、眼差しはやっぱり、どこまでもローカルでした。

**安藤桃子（以下安藤）**：生まれも育ちも東京の、私が思うこの街の印象って、かなりサニーデイ・サービスの『東京』と直結しているんです。青春と真ん中の学生時代にこのアルバムに出合って、何度も聴いているうちに「東京ってこんな街なんだな」って、初めて客観視できた気がして。

**曾我部恵一（以下曾我部）**：それはうれしいです。『東京』は、自分が上京する前にイメージしていたこの街の風景と、上京して暮らすことによって見えてきた風景がミックスされながら生まれたアルバムなので、すごく青くて初々しい音が詰まっています。気恥ずかしいですけど、そのぶん、特別なアルバムです。

**安藤**：東京って東京から離れていた人たちの目線で作り上げられた街でもあるんですよ。まだ上京したてという曾我部さんが作られた『東京』が、私にとってはすごく“東京”らしかった。博士さんのtwitterをフォローしてよく拝見させていただいているんですけど、映画を始め、博士さんはいろんなカルチャーにも造詣が深いんですよね。その眼差しがまた東京の文化を作っていると思うんですけど、その博士さんも東京出身ではなくて。そうやって突き詰めていくと、今や生粋の江戸っ子は下町に行かないとなか

なか出会えないですし、東京って意外と本質がないというか、まるで蜃気楼のような街だになって、センチメンタルな気分になります。**水道橋博士（以下博士）**：僕は倉敷から上京してもしばらくはストレンジャーな感覚でいましたね。

**安藤**：そうなんですか？

**博士**：やっぱり「田舎を捨てる」という意識で上京してきたので「30歳までに芸人として一旗揚げなければ、終わりだ」と思っていましたから。その焦り、タイムリミット感がストレンジャーというか。上京した頃の僕は、相棒（玉袋筋太郎）と一緒に浅草のストリップ小屋（浅草フランス座）で住み込みしながら、芸人修業をしていたんですよ。まあ、当時はひどかったですね……。生きるか死ぬか、本当に人生漂流していました。時代はバブル全盛期。浮かれ切った世間を尻目に、毎日16時間労働で日給1,000円。時給にすると60円です。今振り返ってみてもよくそんなことできたなって。でも当時の浅草は、そういう僕のような明日無き人、なんの将来設計のない人たちが集まってくるような街で。

**安藤**：まるで苦学生のように、お金はないし、明日も見えない。だけど自由はある。そんな文化の染み付く東京が、私は好きです。

**博士**：出発は四畳半だけど、志さえあれば青天井にいけるよって、上までいけるよって感じがしないと、なんていうか、抜けが悪いんですよね。それを求めてみんな浅草にやってきて。そんな当時のことが強烈に心に染み付いているから、今も浅草と同じ匂いのする街、例えば下北沢とか高円寺とかそういう街にいる方が、自分は気が楽なんです。

**曾我部**：今、下北沢に自分の音楽レーベル (ROSE RECORDS) があるんですよ。僕は自動車免許がないので、基本的に移動手段は徒歩か自転車。それもあって自分の生活圏内に仕事場が欲しくて、10年前にこの街で立ち上げました。

**博士**：徒歩や自転車の人は、ローカル感が強くなりますよね。生活圏が狭くなるから。  
**曾我部**：そうですね。それはちょっと不便かもしれないんですけど、僕は自転車の範囲で見える風景と暮らしていきたいなっていう気持ちが常にあったので。でも当時の音楽事務所といえば、青山、原宿、六本木界隈が常識っていう時代で、よく「下北沢で事務所やるの!？」って驚かれました。今は昔よりも場所に対するイメージやこだわりって周りも自分もないですけど、そ

の当時は場所に対する人のイメージや先入観ってすごくあった時代でしたから。

**博士**：僕は代官山とかに行くときちょっと気分が上がります。でも同時に入っちゃいけない感じもしますね。やっぱり自分にはアウェイな空気を感じるんですよ。今高円寺に住んでいるんですけど、これから先も中央線沿線以外住めないだろうなあ。

**安藤**：街の在り方がそのまま人の在り方になることってありますよね。

**曾我部**：そこから見える風景がどこかで自分が作るものに無意識にも影響しているのは確かですね。

**博士**：仕事でいろんな人と対話するとき意識するのは、その人のジャンルや肩書きとかよりも、どこで生まれてどう育ち、今はどこに住んで何を見て過ごしているのか……とか、

そういう今の地点に至るまでの道程なんですよ。年輪を見るというか、その方がその人の本質に辿り着くのが早い気がします。

### 孤独が和らぐとき

**博士**：(安藤さんは) 映画を高知で撮って、それでよく高知に移住しましたね。

**安藤**：3秒ぐらいで即決でした。きっと江戸っ子の血が高知で騒いだんだと(笑)。

**曾我部**：それはどういうことですか？

**安藤**：その場限りでも触れ合うあたかさまみたいなものが、東京の各地域には色濃くあって、私はそんな東京の文化が大好きなんです。例えば新宿ゴールデン街に行って写真を撮ろうとすると「写真は撮らないで!」って雰囲気があるんですよ。それはみんなプライベートには触れられたくない事情を抱えていたりするからで……、でも目があえば「おう!」ってちゃんと笑顔で挨拶を交わしてくれるし、プライベートには触れなくても心で対話ができる実感が持てる。それってきっと長屋文化のあった江戸時代から育まれたものだと思うんです。うちの母方は生粋の江戸っ子なので、私はその血を受け継いでいるから、きっとそう



客員研究員の証はこのロゼット!

This rosette shows that they're our guest researchers!



## Hakase Suidobashi

Momoko Ando

Keiichi Sokabe



いうところに惹かれるんだろうなって。でも15歳でイギリスに留学して、その後ニューヨークで暮らして、いざ東京に戻ってみると、私が好きだったその文化が衰退しているように感じられて。どこに行っても目を逸らされてしまうことが多くなって、すごく悲しい想いになってしまったんですね。

**博士**：高知はあたたかかった。

**安藤**：そうですね! 高知には私が東京で求めていたものが凝縮されていて。だから東京が嫌になったわけではなく、東京で感じていたあたたかさが、高知にあるから移住したのかな。それで今、高知を日本のハリウッドにしたいという企みもあつたりします。

**博士**：高知は日照時間が長いから、環境的にも映画製作に向いていますよね。

**安藤**：はい。海、川、山の三拍子も揃っていますし、人のパワーがすごい。受け入れ態勢がすごくオープンで、『0.5ミリ』の撮影をしてもひとつも問題が起らないし、地元の方にエキストラをやっていたとしてもこれまた芝居がうまい。「一体何!?

この街!」って(笑)。そして何よりここなら、私は孤独死しないと思いました。

**曾我部**：確かに。ツアーで行ったことがあるのですが、高知はみんな優しい。そう、だから高知のような街があるからこそ、逆に東京は孤立する良さがあったと思うんですね。でも……、これからは家族や隣近所との対話、関係性というのがすごく大事になってくるんだろうなって思います。例えば、階段でおばあさんがすごく重い荷物を持って辛そうにしているときに、誰も手を貸そうとしない風景ってもう当たり前ですよ。僕自身も、手を差し伸べることに遠慮してしまうこともあります。でもそうではなくて、「大丈夫ですか?」と一言かけてみる。さりげないけれど、そういう行動が「ローカル」なんじゃないかなって思います。

**博士**：そういう「人たらし」というか、すでにできあがった人間関係のあいだにすっと忍び込める人って、今の時代少なくなってきましたよね。その異能の人のような人物を、『0.5ミリ』では主人公がやっ

ているわけですけど(※)、この能力って東京の人にはすごく欠けている気がしています。それがまた、「2020年、成長の夢」で、淀んでしまう感じがするんですよね。「東京万歳! オリンピック」って言いながら、高齢者の方は増えていくし、孤立していくし、そういう部分はどんどん見放されて貧しくなっていくのではと、予感のようなものは映画を観ながら感じました。

**安藤:** 私は子供と老人、この両者が繋がる真ん中に平和がある気がしています。古くからそれをきちんとやってきたのが日本人だと思うんですけど、今はそれがどんどん崩壊しているから、すごくバランスが悪い気がしています。その課題に対

するいろんな答えが、高知にはきっとある気がするんです。やっぱり東京が大好き、日本が大好き。だからこそ、この先を良くしたい。そのために高知に住んでいます。**博士:** 一度きりではなくて、ずっと高知で映画を撮り続けること。そうやって高知から東京を照らし続けることができればいい。ぜひやって欲しいなあ。

**安藤:** 生粋の江戸っ子だった祖母は何かある度に「死にゃあしない」と言っていました。それは私にとって魔法の言葉です。というのも、これから映画監督であることにぶれはないんですが、入り口から出口まで全部のことを自分で考えたら、「これは映画だけ作っている場合じゃねーぞ」と。

だから「ないなら作ろう、作ればいいじゃん」という発想で、足りないものを自分たちの力でゼロから一つずつ作っていきたいです。失敗しても死にゃあしないと思って。**曾我部:** 街が繁栄するほど、ほころびも生まれて、心だけが置きざりになることがあると思うんです。本来音楽や芸術というのは、そういう繁栄から遠くにあって、もっと人の心の根本にある、大事な部分に触れるものはず。今はインターネットの普及で色々なことが発達して便利な世の中になりましたけど、でも僕の事は10年前と何も変わってなくて。それは待ってくれる人がいる場所に行き歌うことです。こればかりは今後、何が発展し

ても変えようがないんです。

**博士:** 僕も「浅草キッドは47都道府県でライブやります」と宣言してみたりして。なんだかそういうこともやってみたい気がするんですけどね。

**安藤:** それはすごい!

**曾我部:** 観てみたいですわね。

**博士:** 笑ってひとつのコミュニケーションですから。そういう意味では音楽や映画も同じ場所にあると思うんです。この社会の孤独を少しでも和らげるためのコミュニケーションだと。

※介護ヘルパーの仕事をしている主人公は、ある事件をきっかけに、仕事も住む場所も失う。ワケありの老人を見つけてはおしかけヘルパーをして生きていく。

## The city of mirages shines with light

**Momoko Ando:** Born and raised in Tokyo, my impressions of the city are actually formed by Sunny Day Service's album Tokyo.

**Keiichi Sokabe:** Tokyo was born from a mix of my images of the city before I moved here and the actual environment I found myself in after arriving, so it's got a very fresh, unsophisticated sound to it. It's a bit embarrassing, but for that reason it's a very special album.

**Ando:** Tokyo is also a city that's created by those who aren't actually in the city. Tokyo, made just after Sokabe came to the city, struck me as very Tokyo-esque. Unpacking that a bit more, you can't really meet the trueborn Tokyoites unless you go to Shitamachi. It's like Tokyo is actually a mirage.

**Hakase Suidobashi:** I very much felt like a stranger for a while after I came to Tokyo from Kurashiki.

**Ando:** Really?

**Hakase:** Well, I came to Tokyo with the intention of "throwing away my hometown," so I felt that I really had to make it as a comedian before I turned thirty. I felt like a stranger because of that time limit and sense of urgency. When I came to Tokyo, I was living with my comedy duo partner (Tamabukuro Sujitaro) in a small strip club in Asakusa (Asakusa France-za) while I serving my apprenticeship as a comedian. There were many others like me in Asa-



kusa at that time – no tomorrow, no plan for the future.

**Ando:** Just like a starving student. No money, you can't see tomorrow, but you've got freedom. I like that that kind of culture takes root in Tokyo.

**Hakase:** You start on 4.5 tatami mats, but

as long as you've got ambition you can reach the sky. You can't get anywhere without that feeling. That's why everyone came to Asakusa. Those Asakusa days are so ingrained in my memory that I find myself at ease in neighborhoods that give off the same feeling as Asakusa, such as

Shimokitazawa and Koenji.

**Sokabe:** My label, Rose Records, is based in Shimokitazawa. I don't have a driver's license, so I have to walk or bike to get around. That was part of the reason why I started my label in this neighborhood ten years ago. I mean, I wanted my workplace to be near where I lived.

**Hakase:** If you walk or bike you really feel like a local. The scope of your life narrows down quite a bit.

**Sokabe:** Exactly. I always felt like I wanted to be embedded in the local area, living in a small sphere of life that only extended as far as I could go on my bike. But at the time almost every label was based in Aoyama, Harajuku, and Roppongi, so people were always surprised to hear that I was in Shimokitazawa.

**Hakase:** I feel a bit excited when I go to places like Daikanyama. But I also feel like I shouldn't really be there, you know? I feel out of place. I'm living in Koenji now, and I'm pretty sure I won't be able to live anywhere off the Chuo line.

**Ando:** People become like the place they're from, right?

**Sokabe:** The environment around you definitely starts to have an unconscious influence on the things you make.

**Hakase:** When I interview with people, I always pay more attention to where someone was born and raised, where they're living and what they see every day, than I



do to their title or type of work. I've been meaning to ask, but Ando – you shot a film in Kochi, and then you moved down there, right? That's quite something.

**Ando:** It was a three second snap decision. I'm sure my Tokyo blood is freaking out in Kochi (laughs).

**Sokabe:** What do you mean?

**Ando:** The places in Tokyo each have a deep warmth that you can only find by interacting with the people there. I really like that aspect of Tokyo culture. I think that's a holdover from the Edo period's row house culture. My mother's side is pure Tokyoite, and I've got Tokyo blood flowing through my veins, so I'm really moved by things like that. But lately I feel like that culture that I love is on the decline.

**Hakase:** And Kochi was warm.

**Ando:** Exactly – Kochi condenses everything that I desired about Tokyo. I don't want to imply that I started hating Tokyo. It's just that I felt the Tokyo warmth in Kochi, so I moved there. And so I'm trying to make Kochi into Japanese Hollywood.

**Hakase:** Kochi must be nice for filming too, since it stays light for so long.

**Ando:** Yes. It's got the trifecta of the

ocean, rivers, and mountains, plus the people are amazing. Their attitudes are very open and accepting. When I was filming *0.5mm* I didn't have a single problem. I feel like I don't have to worry about ending up alone if I live here.

**Sokabe:** I think it is precisely because there are places like Kochi that Tokyo has the merits of being able to be isolated. But...I feel like interactions with family and neighbors are going to become more important from here on out. If something happens, people will be asking if you're okay, rather than pretending they didn't see anything. I think that's the meaning of "local," really.

**Hakase:** The number of people who can slip into those sorts of already established network of people is decreasing nowadays. The protagonist of *0.5mm* is one of the people who can do that, but I feel like that's a skill that's really lacking in Tokyo. And the slogan, "2020, Dreams of Growth" really feels stagnant to me. Everyone is running around excited for the Olympics, while in reality the number of elderly people is increasing and they are growing more and more isolated. Watching the film,



I really felt that those parts of our society were being forsaken.

**Ando:** I think that harmony exists in the connection between children and the elderly. But since that sense is falling apart recently, I think there isn't much balance anymore. I also feel there are quite a few answers to that problem to be found in Kochi.

**Hakase:** So you plan on continuing to shoot films there. If you manage to continue to spotlight Tokyo from Kochi that way, it'd be really impressive.

**Ando:** My grandmother, a true Tokyoite, always said, "Well, it's not like I'll die," whenever something happened. Those are magic words for me. For, while I have no intention of abandoning directing, looking at the whole picture from beginning to end, I'm starting to think that this isn't the time to be making only films. That's why I've decided to make whatever I find lacking, one by one. Even if I fail, it's not like I'll die.

**Sokabe:** Even though the Internet has made life and new development much easier, my job hasn't changed from what it was 10 years ago. My job remains going to people who are waiting for me, and singing to them.

**Hakase:** I might as well say that Asakusa Kid will be doing performances in all 47 prefectures in Japan.

**Ando:** That's amazing!

**Sokabe:** I'd like to go see that.

**Hakase:** In the end, comedy is a form of communication. I think music and film are in the same space. They're communication that eases the loneliness of society a little bit.



#### 曾我部恵一 Keiichi Sokabe

1971年香川生まれ。自主レーベル「ROSE RECORDS」を主宰しながら、ソロを始め、再結成したサニーデイ・サービスなどで活動。2014年10月、サニーデイ・サービスのニューアルバム『Sunny』をリリース。

Born in 1971 in Kagawa. While running his own record label, Rose Records, he plays as a solo act, in the reunited Sunny Day Service, which released their newest record, *Sunny*, in October 2014.

#### 安藤桃子 Momoko Ando

1982年東京生まれ。2010年脚本を務めた『カケラ』で監督デビュー。2011年初の書き下ろし長編小説『0.5ミリ』を刊行。同作を自ら監督した『0.5ミリ』が、2014年11月に公開。現在高知に移住し、観光特使を務めている。

Born in 1982 in Tokyo. She debuted as a director with the self-written *Fragments* in 2010. She published the novel *0.5mm* in 2011 and directed the film version of the book that opened in November 2014. She currently lives in Kochi, where she works as a sightseeing ambassador.

#### 水道橋博士 Hakase Suidobashi

1962年岡山生まれ。1987年「浅草キッド」としてコンビを結成。以来、テレビ、ラジオなどのメディアや著書の執筆など幅広く活躍。最新刊に『藝人春秋』がある。有料メールマガジン「水道橋博士のメルマ旬報」を月2回配信中。

Born in 1962 in Okayama. He formed the duo "Asakusa Kid" in 1987, and has since made appearances on television, radio, and in writing. He recently published *Geinin Shunjuu (Comedians' Chronicle)*, and publishes a bi-monthly e-zine called *Suidobashi Hakase No Meruma Junpou*.